特集

四百年の歴史と技

みかわち焼の魅力

四百年の長い歴史を誇る「みかわち焼」。今もその技術は脈々と受け継がれており、国内をはじめ世界各地から高い評価を得ています。今回はあらためてその歴史を振り返りながら、オランダ王国献上の取り組みや伝統技法の紹介、絵付け体験などについてお知らせします。

1「透かし彫り」の作業の様子。穴を空けていくと乾燥が進むので、休むことなく、くりぬいていきます

御用窯から民窯へ　みかわち焼の歴史

みかわち焼のはじまり

みかわち焼の歴史は16世紀末に豊臣秀吉が朝鮮に出兵した「文禄・慶長の役」に始まります。平戸藩の領主・松浦鎮信が帰国の際に陶工の巨関を連れ帰り、中野(現在の平戸市)に窯が誕生しました。これが現在のみかわち焼のルーツの一つです。

もう一つは、同時期に誕生した唐津焼からの流れです。当時、唐津の領主である波多氏が陶工を保護していましたが、戦をきっかけに豊臣秀吉の不興を買い、領土を取り上げられ、唐津焼の陶工は九州の各地に離散しました。彼らが行き着いた先の一つが現在の三川内(木原・江永地区)でした。

白い器の誕生から御用窯へ

三川内では当初は陶器を焼いていましたが、1640年ごろに白い焼き物(磁器)へと変わり始めます。巨関の子である今村三之丞が、寛永10(1633)年に針尾島に網代陶石を発見したことがきっかけです。平戸藩は寛永14年に三之丞を窯場の責任者兼役人である皿山棟梁代官に任命し、「御用窯」を設置しました。御用窯とは、藩の保護を受けて良質な原料と最高の技術を駆使して器を焼く窯のことです。

寛文2(1662)年からは三之丞の子・今村弥次兵衛(如猿)が原料として天草陶石を使い始めたとされ、磁器生産が本格化します。このころから「透かし彫り」や「置き上げ」などの細工も作り始められました。

海外輸出で高い評価

平戸藩の厚い保護下にあったみかわち焼は、民窯と違って採算を度外視し、技巧を凝らした焼き物を作ることができました。卓越した技術による質の高さで注目を集めていきますが、寛政年間(1789年～1800年)ごろまでは献上品として禁制の非売品であり、その製法は門外不出でした。

文化元(1804)年ごろに輸出が始まり、この時代の御用窯工人によって「卵殻手」といわれる極薄のコーヒー碗やワインカップなどが開発されました。それらは海外に輸出され、高い評価を得ていました。

御用窯から民窯へ

明治維新を迎えて藩がなくなると、三川内山は御用窯から民窯への転向を余儀なくされ、民窯としての実績がなかったために一時は衰退の危機に陥ります。この状況を見て、平戸藩で最後となった御用窯の棟梁の甥・豊島政治が再建に乗り出し、販路を拡張しました。また、明治32(1899)年には伝承の技を守るため、三川内山に意匠伝習所が創設されました。

三川内御用窯の優れた技術は、伝習所での指導の下、若い陶工たちによって受け継がれ、時代の流れと共に新しい意匠考案も加えられながら、今日のみかわち焼に伝承されているのです。

みかわち焼の技法

1 2 透かし彫り

器面の一部をくりぬいて模様を表す技法。穴を空けると不安定になるため慎重な作業が要求されます

3 置き上げ

水で溶かした白色の化粧土を筆で塗り重ね厚く盛り上げて絵柄を作る技法

4 手捻り

素地と同じ土と細工のあらゆる技法を用いて形をつくる装飾技法。龍や獅子、菊など写実的で生命感にあふれた動物や植物がつくられています

※写真1～4は大川裕弘撮影。

3

4

2

オランダ王国へ献上　夢と希望を運ぶ気球船

献上品で三川内のPRを

昨年の7月、みかわち焼の水次がオランダ王国に献上されました。献上されたのは、オランダのライデン国立民族学博物館が所蔵する江戸時代末期ごろのみかわち焼「白磁気球船形水注」を再現したものでした。

「はまぜん祭りの第30回を記念しての制作でしたが、企画を通して三川内のPRや活性化につなげたいと思っていました」と話すのは第30回三川内焼窯元はまぜん祭り実行委員長の中里太陽さん。みかわち焼の窯元の一つである平戸洸祥団右ヱ門窯の18代目です。

夢と希望を運ぶ気球船

この作品を再現した理由について尋ねると、「15年前にオランダの博物館で見たみかわち焼がずっと心に残っていて、三川内から世界に渡った名品を再現してはどうかと考えました。そこで候補に挙がったのがこの水次です。ユニークなデザインが目を引くことと、気球船という形から『夢と希望を運ぶ』イメージにつながると思ったんです。窯元が集まって話し合い、全員一致でこの水次を再現することに決めました」と中里さんは話します。

より進化した作品を

水次の再現は、当時の制作方法が全く分からない状態からのスタートでした。

「基になる作品の制作者の子孫である口石さんや旧平戸藩主の松浦家にアドバイスをいただきながら制作方法を検討しました。それと、全く同じものを作るわけではなく、より進化させた作品を作りたいと思っていました」と中里さん。その言葉どおり、船の手すり部分に「透かし彫り」、船尾の部分に「置き上げ」の細工を施すなど、みかわち焼のさまざまな伝統技術を結集させた作品となっています。

試行錯誤の繰り返し

その趣向を凝らしたデザイン故に、制作には多大な労力を要しました。

「実際に作り始めてみると思い通りにいかないことが多く、作っては失敗の繰り返しでした。なんとか形になったと思えたときには、もう窯入れの時期が迫っていました」

一つ完成させるだけでも大変な作品ですが、献上品を完成させるまでには数十個もの試作が重ねられました。

こうして完成した献上品は、窯元の職人の魂が込められた作品となったのです。

世界に誇る高い価値

献上された白磁気球船形水注は、オランダ王国大使によって国王に献上され、現在は王室内にある「日本の間」に所蔵されています。日本の間の所蔵品は、オランダの王室を訪れる世界各国の人々の目に触れる機会があります。

国王に献上したいという国や人は、世界各地に数多く存在するとのこと。その中でも、オランダとのつながりや歴史的背景、献上品そのものの価値が認められたものでないと国王の手元には届けられないそうです。

みかわち焼の窯元の職人が魂を込めて作り上げた白磁気球船形水注は、オランダと日本の絆を結び、みかわち焼の存在を世界に広めるという夢と希望を運ぶ役割を見事に果たしたといえるでしょう。

世界で認められたことを市民の皆さんに知ってほしい

中里さんは数年前からドイツやオランダの展示会にみかわち焼を出品するなど、世界に向けた発信を精力的に行っています。こうしてみかわち焼の魅力を世界に発信することで、むしろ日本の多くの人にみかわち焼の価値を知ってほしいと中里さんは言います。

「世界で評価されていることをもっとPRして、国内や県内、そして市民の皆さんにみかわち焼の魅力をさらに知ってもらいたいですね。そして、実際に三川内を訪れるきっかけになってほしいです。かつて窯元の職人でにぎわったころのように、みかわち焼によって三川内全体が活気づくことが一番の願いです」

日本遺産の認定を目指して

現在、長崎県(2市1町)と佐賀県(4市1町)は、焼き物の歴史等をテーマとして、文化庁の「日本遺産」認定を目指しています。その地域で生まれ、繁栄した有田焼・三川内焼等のルーツや、その高い技術の継承などに光を当てた取り組みです。

現在、このように周辺地域と連携した取り組みなど、さまざまな施策が進められていますので、今後の展開にご期待ください。

（取材日　1月23日）

みかわち焼の技法

菊花飾細工

先端の尖った竹の道具で、土の塊から花びらの形を一枚ずつ切り出す技法。写真は平戸洸祥団右ヱ門窯・中里太陽さんの製作の様子と同窯17代目・一郎さんの作品

渋谷ヒカリエの展示会の様子

1月20日～2月1日に東京都の渋谷ヒカリエで「長崎 みかわち焼展」が開催されました。会場は展示された豆皿などを見る来場者でにぎわいました。国内でもこうした展示会を各所で定期的に行い、みかわち焼の魅力を発信しています。

平戸洸祥団右ヱ門窯18代目・中里太陽さん

オランダ王国に献上された白磁気球船形水注

体験！

「骨描き」と「濃み」を学ぶ

みかわち焼の代表的な技法の一つ「染付」。素焼きの白地に、呉須（藍色の絵の具）を含ませた筆で絵柄などを描き、着色する技法です。絵柄の輪郭を描く作業を「骨描き」と呼び、呉須で輪郭線の内側を染めていく作業を「濃み」と呼びます。この2つの作業を合わせて「絵付け」と言います。

今回の取材で、平戸松山窯の中里月度務さんに教えていただきながら絵付けを体験しました。

器を手本に

まずは素焼きに鉛筆で薄く下描きします。下描きでは自分の好きな絵柄を自由に描くことができます。今回はみかわち焼の代表的な絵柄「唐子」が描かれた皿を手本にしました。

職人が描いた絵柄をじっくり眺めていると、唐子の楽しげな様子や躍動感が一筆の流れるような線で表現されていることが分かりました。

筆で描く「骨描き」

下描きが終わると、いよいよ骨描きです。筆で描くこつは、机などで腕を固定して描きやすい角度に皿を立てることで、思い切って描いた方が線が歪みにくいとのことでした。実際にやってみると筆の運びなどが難しかったですが、絵画のような面白さを感じました。

みかわち焼特有の「濃み」

次に濃みの作業です。濃み筆は、筆を立てると呉須が出ますが、横に寝かせると出ないという特徴があります。筆の角度によって呉須の量を調整しながら素焼きに呉須をにじませ、筆の運びで呉須を広げていきます。

この方法はみかわち焼特有のもので、思うように濃淡を出すのはとても難しいことが分かりました。

体験を終えて

実際に絵付けを体験することで、職人の高い技術を肌で感じるとともに、その奥深さや面白さを感じることができました。また、完成する前の素焼きの器に触れるなど、貴重な経験ができました。

今回は特別に窯元で体験させていただきましたが、初心者向けの絵付け・透かし彫り体験は三川内焼伝統産業会館で随時申し込みを受け付けています。皆さんもみかわち焼の器に触れ、世界に一つだけの作品を作ってみませんか。

（取材日　1月27日）

絵付け・透かし彫り体験

絵付け体験

場 三川内焼伝統産業会館
内 皿、湯のみ、マグカップの制作体験
料 1個1000円（送料が別途必要）
※完成までに10～15日かかります。
　完成品は送付します。

透かし彫り体験

場 三川内焼伝統産業会館
内 ペン立て、アロマポットの制作体験
料 1個2500円（送料が別途必要）
※1週間前までに要予約。
※完成までに30日以上かかります。
　完成品は送付します。
申 電話で三川内焼伝統産業会館へ。
　ホームページ（http://www.mikawachi-utsuwa.net/）からも申し込みできます
問 三川内焼伝統産業会館
　☎30-8080

（上）平戸松山窯・中里月度務さん
（下）中里さんによる骨描き

濃み

骨描き

骨描き

下描き

光を通して輝く卵殻手

右の写真は、明治9（1876）年に開催されたフィラデルフィア万国博覧会に出品された「卵殻手」のカップソーサーの習作です。五光窯の13代目・藤本岳英さんに見せていただきました。光源にかざすと光を通して輝くほど薄く作られた焼き物で、細密な赤い線と金などで表現された模様も、当時の三川内が得意とする手法でした。博覧会に出品されたみかわち焼はどれも注目を集め、高い評価を得たといいます。

器の違いは窯元の個性

五光窯では「結晶」や別名賢者の石と呼ばれる「辰砂」など、さまざまな技法を用いた独特な作品を制作しています。

みかわち焼と一口に言っても、窯元によって得意な技法や器の違い、それぞれの歴史などが存在するのです。

窯元を訪れてこそ

みかわち焼の陶磁器にまつわる話も伺いました。御用窯だったころ、みかわち焼は純白ではなく、ややくすんだ温かみのある白でした。その色は網代陶石と天草陶石を混ぜ合わせて作られるみかわち焼特有の色味で、特にヨーロッパで好まれたそうです。このような興味深い話を聞くことができるのも、窯元を訪れてこそだと感じました。

それぞれの窯元を訪ね、職人の話を聞き、器に見て触れる。そんな貴重な経験ができる窯元が三川内には31カ所もあります。ぜひ自分自身の目で、みかわち焼の価値を確かめてみてください。

（取材日　1月23日）

みかわち焼に関する問い合わせ
観光物産振興局　☎24・1111
三川内陶磁器工業協同組合
☎30・8311